

# プラトン国家篇の研究 (三五七a—四四五e)

遠 藤 貞 吉

## 第二卷 三五七—a—三六八b①

以上で正義についての議論は一応了つたがと思われたが、実はこれから正義についてそれに伴う利不利というような附随的な条件によらず、その本質にたち入つた根本的の議論を始める。今ソクラテスに対する者はグラウコンである。

善なるものの中には無害な楽しみのように、そのもの自体のために人々によつて喜びむかえられるものと、知識、視覚、健康のようにそのもの自体のためのみならず、そのものから生じる結果のためにむかえられるものと、体操、治療、金儲けの術のように、それ自体は不快であるが、それからして生じる結果のためにむかえられるものゝ三種がある。正義は第二の種類、最高の種類の善であるが、多くの人はトラシマコスのように第三の種類に属すると考えている。それでかりに正義は或る人々の主張する如く無力で損なものとし、一方では極力不正を弁護しつゝ、これに正義を対照して、それ等が本来何であるかを究明しよう。

吾身にとつて善、即利益は他人に不正を加える事によつて得られる、しかし他人から不正を加えられる事は吾身にとつて損、即悪である。然るに世の中は吾々の経験から考えると、今のべた意味での悪の量が、善の量よりも多い。ところが大体人は敢えて他に不正を行つて憚らず、自らに加えられる不正を防ぎ得る程に強くない。そこで彼等は他に害を加えず、又他から害を加えられないよう約束を結び、法を定める。この法の定めるところが正義とよばれる。実は最高の

善即最大の利益は、いくら他に不正を加えても罰せられる事なきことであり、最悪即最大の損は他からいくら不正を加えられても報復する事ができないことである。所謂正義は最善と最悪の間で、このような正義は本来の善ではなく、比較的小さな悪として寛容されているだけである。敢えて不正を行ひ得る程に強い人はそんな約束はしない筈である。

人が正義を行うのは自ら進んで行うのではなく、不正を行うだけの力がないからであるということは、たとえば正しい人と正しくない人が同じように思うまゝに行う力をもつたとするなら、両者共自身の利益を求め、同じ道を進むだろうし、正しい人ももしギーグスの指環<sup>④</sup>を与えられたら不正を行つて憚らないだろうという事を想像すれば、容易に理解される。完全に不正な人は不正を極めて、尚よく正しい人だと思わせ、過誤を犯してもすぐ取りつくらう事ができ、所謂正しい人のうける名も利も尽くそれを獲得する、然るに完全に正しい人も人に正しいと思つて貰えなければ、あらゆる苦痛迫害をうけねばならない。かくして正、不正のいずれがより幸福であるかは明白である。

かりに不正の讚美者となつてグラウコンが以上のように論ずると、それに加えてアディマントスはいふ。

世間の親や教師は子供に正しくあるように教えているが、それは正しくある事そのためでなく、正しいと人々から思われたいと損をする、正しいと思われれば先きにグラウコンが不正の人が獲得するといつたあの様な利益が与えられるからというのである。こうした事は只に詩人達がいつてゐるばかりでなく實際社会を見れば明らかである。正義は尊ぶべきものであるが、不正による楽みや利益は得易いのは事實である。只法と輿論に迫られて正を行つてゐるだけである。神話には神々さえも正しき人に禍を与え、不正の人に幸福を与えた話がある。富める人は祈や供犠や呪文等により神意を已に有利に動かしている。かくては子供等はたとえ人は正しくても、正しいと思われぬ以上は利益がないのみか不幸でさえある。たとえ正しくなくても正しいと思われさえすれば利益があると信じるようになる。不正を行つゝ正義の仮面をつけるためには詭弁を教える教師もいる。只一人では心細いなら徒党をくむ事もできる。このように考へてみるものゝ、吾々の心の事ではしかし神は欺くことはできないという声をきくことがある。でも神々は果してある

のか。もはやないものなら勿論、あるとしても人間に對し關心をもつていないなら、吾々はどうして正義を固守せねばならぬとの信念をもち得るだろう。神々は伝説と詩人の神々であり、且つその神々は犠牲や哀願を以て動かされる。もしその心に神性が宿つて居り、それによつて不正に對し烈しい憎を持ち、真知によつて不正を斥けるというような人でなければ不正を心から怒る事はできない。

アディマントスはかく論じ、これまでの議論はトラシユマコスとの議論と同じく、正不正に伴う結果からの議論であつた。進んで正、不正は魂にどんな力と結果を与えるものか、如何にして魂の本質の中で正義が最大の善であり、不正が最大の禍であるかを究明しよう。この事が明らかにされ、これによつて子供を教育するならば人々は他人に不正をさせないよう警戒するよりか、むしろ自らの心を警戒するようになるであらう。正はそれより生ずる結果のため、又それ以上にその事自身のために望まれるのだから、正がそれを所有する当の人において作用する本質的善についてお教えを願いたいと、ソクラテスにいう。

これから本論に入るわけであるが、結局ソクラテスは正義と幸福と一致する事については、直接何もいわない。しかしこの両者は理想国においては本来一致して、正義のあるところ自ら幸福があるとす。それはカントが道德と幸福とが一致すべきことは人間本来衷心からの要求であるに拘らず、現実の世界では必ずしもそうでない、かくて靈魂の不滅を要請としてうちたてた事に通ずるものがある。又他に不正を加える事即吾々にとつて善だという事は大きな飛躍で、むしろ事実としては吾が善と他人の善（善は利益の意）と一致する事は当時のギリシアにおいても勿論の事であつたろう。それに拘らず不正によつて利己が計られ遂げられている事も否定できない。戦争によりて巨利を占めるのみか、巨利を占めるため戦争の發生を願ひ或は計りさえする者があるという事が事実なら、又今日の吾国の政治では正直者が馬鹿をみるという事が事実なら、又少くもそうした氣持が有力に行われているなら、ソフィスト流のこの考をむげに虚妄として捨てざる事できない。道德と幸福の關係については嘗て筆者は本論集において多少論じた事がある。<sup>⑤</sup>

## 第二卷 三六八。—三七四。

ソクラテスはかの二人の青年を相手に正義の本質を探索する。

たとえば眼の近い人が遠くから小さい字を読めといわれても、それは仲々困難な事である。しかしもしその事がどこか他の所に大きい字でかいてある事を知つたならば、まづ大きい字でよんで、それから小さい字に移つて何がかいてあるかを調べるだろう、正義は個人の徳としても又国家の徳としても語られる。これを機微な心の中に探るよりもまづ国家について探つた方がわかりよくはないか。そこで吾々が今一つの国を作るとして、その成立の過程において、正不正が何であるを見てみよう。

元來人間には多くの欲求必要があつて、自分一人で自給自足はできない。どうしても他の多くの人の手をかりなくてはならぬ。このような若干の仲間が一つ土地に住んで、各互に助け合うという事から国家が始つた、最根本的の要求は食物で、次で住居衣服である、ところがたとえば或る人がまづ自分のために食料を作り出し、それから自分のために住居や衣服を作るであろうか、人は元來性質を異にしていて、それぞれ異なる仕事を得手としている。一人で凡ての仕事をするよりか、一つ仕事を専らにする方が仕事の質も量もよいにきまつている。そこで農夫、建築屋、織屋、靴屋等ができるが、そうした分業でいくと農業のためには農具を作る工人も必要になり、同様にして各方面の仕事をする者ができる。ところが一つ土地からその土地に住む凡ての人の必要要求を充すだけのものを生産しないから、他の国と交易するために、又同じ国内でも業者の作つた生産物を必要とする他の人に得させるために、商人、貿易業者が必要になる、航海者も入用である。もしぎりぎりの生活だけでなく余裕ある贅沢な生活をするようになれば音楽家詩人俳優僕婢菓子屋料理人等もできる、かうして国が次第に充実してくると土地が狭くなつて隣接地が必要となり、他の国も同じだとすれば領土争い、戦争が起るようになる。そうなれば専ら戦争に当る防護者が必要となる。

右の議論の始めに、ソクラテスはまづ国という大きい文字で読んで、その後個人という小さい字について調べるといつている。ジョーエツト<sup>⑥</sup>は、当時のギリシアは国家が一次的で、個人は国家あつての個人であり、国法や国家の宗教はなれては善惡の観念はなかつた、個人がその權威をかちとつたのはその後の久しい努力の後であるといつてゐる。しかし同時にかゝる努力の發端がこゝにある事を認めたい。この前の議論の中に已に個人の胸に宿る良心に言及されてゐる。又ジョーエツト<sup>⑦</sup>はソクラテスの議論に政治と倫理、個人と國家の混同或は同一視が見られるという。たしかにそうではあるが、「まづ前者（大きい文字のこと）を読みそれから小さい方をよみ、この二つが同様であるか否かをみる事ができるのは、思うにこれ一つの仕合せである<sup>⑧</sup>」といつてゐるのをみれば、ソクラテスは今日の人のよくやるように類推によつて甲から乙を導き出したまゝ、改めて乙を吟味する事を忘れてはいなかつたと思われる。

ソクラテスの國造りは歴史的な事實としてのべているのでなく、國家の成立を論理的に考へてゐるのである。そしてまづ國家について正義の問題を考察する事は、國家において郭大してゐることができからであり、客觀に写してゐる方が見やすいからである。

## 第二卷 三七五 a——第三卷四一二 a

防護者の任務は最大切で、これには最適任の人を選ぶべきである。防護者は育のよい犬のように眼も足も早く戰に強いものでなくてはならぬ、彼は氣力を具え勇氣があり、敵に対しては恐るべき者であるが、味方にはやさしくなければならぬ。しかし勇猛と柔和は正反對の性質で、一人の身でこうした矛盾したと思はれる性質を具え得るだらうか、番犬を見てみると、それは親しい者は、たとえ必ずしも利益を与えてくれる人でなくとも、おとなしく喜びむかえる。しかるに見しらぬ人はよしんば己れに害を加えなくてもこれに吠えついたりかみついたりする、それを区別するのは彼を知るか知らぬかの規準である。知無知が敵味方を区別する標準である、防護者も同様で知識の標準に照らして敵味方を知

る。そのような知力は學問によつて養われる。學問を愛し知恵を愛するものは哲學者で、防護者は哲學者である。

然らば防護者の教育はどうすべきであるか。伝統的教育のように体操と音楽とによる。その中でもまづ音楽によつて教育する。音楽には文学が含まれている。子供は早くから物語によつて教える。子供にきかせる話は全く真理を含まないわけではないが、概ね仮作の話である。だが凡て物事は初めが大切で、子供時代に与えた印象は永久に残り、幼少時に性格が作られる。それ故只でために偶然の人の偶然の話をきかせ、大人として当然持つべき觀念は自然に得るまゝに放任しておいてよいものであらうか。否、檢閲者によつて子供にきかせるべきものと然らざるものと判別させるべきである。今日話されている話は大抵捨て去るべきものである。最すぐれたと思われるホメロス、ヘシオドスでさえ、好ましくない話が多い、そこには神々や英雄について彼等にふさわしくない事がのべてあり、人間についても親子友人の間にあるまじき所業が語られている。そうした事が是非語られなくてはならぬなら、少数の選ばれた人にだけ、且つ特に限定した条件の下に語らるべきである。たとえそれ等の事を比喩的に話すとしても幼少者には事実と比喩の区別ができないのであるから、彼等の耳にいれるべきではない。尤も国を作る者として詩の一般形式と詩人の守るべき限界を定めはするが、具體的の詩を作る仕事は国を作る人の仕事ではない。

さて詩の内容について神については如何なる事が云わるべきであるか。第一に神は善きもので、惡をなさず、惡の原因でない、人間の間にある凡ての善きものゝ原因である。もし人が神によりて惡を与えられたとしたら、その人が當然惡を受くべき者であつたのである。第二は神は不變不動で變化するものでない。もし或る物が變化するとするなら、自らの力で變化するか、他の力で變化するかである。凡て物は最良の状態にあるときは、最健全な状態にある動植物のように、最勇敢な最賢明な精神のように、外部からの影響は仲々受けないものである。況んや神と神的なものは完全で外から影響される虞は最少いものである。もし自身の力で變るとして、神の場合それは已に完全なものであるから、變るとするならより劣れるものになるほかない、しかし完全なものがわざわざ不完全なものになるといふことはあり得な

い。神が言葉や行動で人々をして自分を神でないかの如く思わせる事ということも、それは欺りであつて、神が行う筈がないことである。蓋し吾身の最高く最真なる部分について、又最高く最真なる事柄について欺くことはあり得ない。

虚偽の中では魂における真実性について他を欺き、自らも欺かれる事が真の虚偽<sup>⑨</sup>で、最輕蔑すべきものである。言葉を以てする虚偽はこの真の虚偽の写しであり、影である。敵や佯りの友達からの危害を防ぐとか、医薬や予防薬として虚偽は役に立つ事はある。又人は昔の事は知らないから神話において虚偽を真らしく語る事があるかもしれない。しかし神は恐れるべき敵もないし、愚人狂人を友人としているわけでもなく、過去を知らないこともない、神には絶対虚偽はない。

こゝに今日の不良文化問題が論じられている。これは今日の吾国においても、否今日の吾国において特に問題である。所謂文化人芸術家思想家達は出版や芸術や言論の検閲制を極力排斥する、それは学問思想芸術それ自体に関しては当然であり、それ等の自由はあくまで守らるべきである。問題はそれが作品印刷物として世間に投げ出されたときそれは一般世人に全然無差別に公開されることである。たとえば「チャターレー夫人の恋人」の事件の如き、かりに訳者の云う如くめざす処は性道德の高上であつたかも知れないが、それをよむ人の中には非常に性的刺戟をうけやすい青年達も多くあり、彼等が果して正しく教をそこに見出し、好ましい影響をうけるだろうか。かゝる書物の出版が何かの制限をうけるのは当然である、世間の一般教養の水準に照らして適當の処置がとられるべきであり、その判断には所謂文化人は思つた程あてにならない。官憲の圧力と一般輿論の圧力と知識階級間の輿論の圧力とは時代により個人によつて余程異なるもので、勇敢と見える言動も案外怯懦であり、容易なるが如く思われても案外困難な事もある。しかし他人の心事に立ち入つて文学者や芸術家の意圖を疑ふ必要もない。とにかくこの問題を広く一般の人々、殊に未成熟な次の世代を考慮して、広い視野において親切に考えなくてはならない。恐らくそこに凡ての人を満足せしむべき解決はあるまい、

互に意見を異にする者が自己の主張を守りつゝ、対者の主張もきき、よりよき解決に近づきつゝ、善意を以て寛容的に争う事が眞の向上発展の姿であると思われる。

次に防護者の教育においては死の恐怖を語るようなものは斥けねばならない。こうした話はホメロス等の詩においてむしろ詩的魅力に富んだ個所であるだけに少年の耳にいたくない。善き人は自身のためにも又自身の幸福のためにも自己で事足りるので、今更生命や富の亡失を悲しむわけではない。反対に馬鹿笑いをするようなものもよくない。極端はやがて反動を生じるであらう。

青年は又節制を学ばねばならない。即ち指揮者の命令、又食欲性欲については自身の命令に服すべきである。神々や英雄達が死を怖れたり、利益に動かされたということは不合理で青少年の聞くべき事でない。悪人が常に幸福であり、善人が常に不幸であるなどというべきでない。詩の内容についてはまづ以上の如くである。

次は様式の問題である、凡そ神話や詩は現在過去未来の出来事についての話であり、それは作者の立場からのべるか、作者が作中の人物となつてのべるか、この両者の併用かの三種類がある。喜劇悲劇は作中人物の言葉で一貫した模倣の物語である。ディテュランボス<sup>⑩</sup>は作者自身が唯一の語り手である、叙事詩その他は両者の併用である。様式の問題は、模倣芸術において模倣が許されるか、許されるなら全部か一部か、一部ならどんな部分かと云う事である。人は或る一事に適し、その事について堪能になる事ができる。第一に同一人が人世において真剣な役割をつとめつゝ、模倣者となつて、他の多くの役割を上手に模倣する事はできない。同一詩人が喜劇悲劇の両方に成功することもできないし、同一俳優がその両方を上手に演ずる事もできず、よいラプソディスト<sup>⑪</sup>がよい俳優になる事もできない。国家の防護者は只管国の自由の維持に献身する者であつて、他を模倣する事などあるべからざる事である。只年少のとき模倣するなら将来の職務に適する人のみを模倣すべきで、習はやがて性となる。よき人を模倣するにしても、よい人はその人の立派な振舞を最喜んで又熱心にまねるが、弱点を示すような振舞は真面目にはまねない。もし立派でない人をまねるとした



ら、せめてその人の立派な振舞をまねる。そこでもし物語をかくとするとホメロスのように模倣と物語の両方を用い、全篇が長ければ模倣の部分は少くする。これと別種のもの是有生無生に拘らず、凡て洩れなくまねて、全部模倣のみからなり、或は極少量の物語のみ含んでいる。

こゝからソクラテスは詳しく音楽或は芸術を論じている。プラトンの全著述の中で最詳しく芸術を語るのはこゝである。国家篇の研究を題目とするこの一連の論文においては、主として道徳と教育とについてのべるつもりで、芸術論はしばらくさしおくことにする。しかしもし何かの機会が与えられるなら、特に芸術に関するプラトンの思想を攻究してみたいと思う。

少年は音楽について体操によりて訓練されるが、それは音楽のように早くから始められ、又一生通じて行われねばならない。しかし魂はよい身体の肉体的運動によつて向上せしめられるのでなく、魂自身の卓越性によつて身体を向上させるのである。精神が十分訓練されたならば、それに身体に関する特殊の世話を委ねる。防護者としては第一に酩酊をさける。運動家の身体的習慣は懶惰であるが、それは健康を危くする。防護者は眼をさましている番犬の如きで、視聽を鋭くし、寒暑粗食に耐えねばならぬ。善き体操は單純な音楽と並んで双生児である。浮華を退けた剛健な生活は調和に充ちた音楽に比せられる。

音楽は魂の節度を生むが、その複雑<sup>⑨</sup>は放恣を生む。体操は健康を生むが、その複雑は病を生む。不節制と病とが国に殖えたと法律家医者が忙しくなり、卑賤の人のみならず教養ある人も彼等を煩わす事多くなる。正義を我が許に見さないでこれをかく他人に求めるのは教育の誤つている証拠で、もつと甚しくなるとつまらぬ利益のために訴訟を好み詭計に巧なことを誇るようにさへなる。今日は昔より病が多いのは放縱懶惰のためである。よく治つた国では誰も皆なすべき仕事をもち、一生を病身で送る程暇な人は居ない。金持は定つた仕事をもたず、仕事ができないようなら生きる価もない事を考えても見ない。只だだらと食養生などする事は、凡て人の仕事にいそしむ事を妨げるが、中にも学問

が頭痛の原因だなどと考えて、研究反省思索を妨げる。昔の名医アスクレピオスはそれ故、元來は健康な体格の人がはつきり病氣にかゝつた時にはそれを直したが、不節制によつて自分にも他人にも役に立たぬ病身で一生を送る人には手がかさなかつた。

法律家と医者とは、最すぐれた医者となるには醫術を修めた外、自分も種々の病にかゝつてそれを経験した方がよい。蓋し肉体という道具で肉体を直すのではない、もしそうだつたら肉体が嘗て病んだとか今病んでいるのでは差支える。そうでなく肉体を直すのは精神であるのだから、その精神が病氣であつたとか、病氣であるという事では困る。

然し司法官の仕事は精神で精神を支配する事であるから、医者と同じように、自分でも惡を一通り行つた経験をしておくとか、年少時から惡しき精神と交つておくとか、惡しき精神の間で訓練されるとかいうことは決して必要でない。健全な判断を下し得るためには若いときから惡しき習慣や惡のための汚染があつてはならない。しかし若い人はとかく不正直者にごまかされる。それで司法官は相当年をとつて長い間の経験觀察から惡について十分の知識をもつて居らねばならない。もし惡の経験をつんだ人であるなら、他に對し不合理な疑惑を抱き、正しい人の事を解しない。惡は徳を知らない。徳ある人は教育によつて向上し、善惡の判断をすることができる。

本来体操は魂の氣力の部分を刺戟するので、普通の運動家のやるように只筋力を發達させるためでない。音楽と体操とはそれぞれに魂と身体の訓練すると思われているが、実は兩者共に魂の向上を計るものである。もし体育にのみ専心すると強剛と勇猛の氣質を作る、音楽にのみ専心すると柔和軟弱を生む、氣力は適当に教育されると勇敢になるが、すぎると狂暴になる、理性は温厚を生じるが、事によると軟弱になる。防護者はこの両面を程よく調和すべきである。音楽は魂の中にやさしい調子を吹きこんで第一段では氣力を鍊り有用なものにするが、第二段ではそれを溶かし了う。これに反し激しい運動と大食は人を音楽と哲学とに不適当のものとし、精神を鈍くし、終には狂暴痴愚にする。魂の中のこの氣力的原理と哲學的原理とは、琴の糸のようにゆるめたりひきしめたりして互によく調和せしめられねばならな

い。このような人がよく国家の防護者たり得るのである。議論はこゝに一段落をつける。

司法官たるものは悪についての経験がなく、そうした事を教えられないがよいという事について、たとえ悪人でも回心<sup>⑧</sup>ということがあると指摘する事もできる。それに拘らず司法官は人に対し有罪無罪や刑の大小を定むべきであるとするなら、やはり悪しき過去をもたぬことが必要である。

音楽と体操と、大まかに云えば知育体育共に魂の向上を志すとの所論は全面的に同意する。只体力や肉体的技倆の鍛錬を志すにすぎないようでも、その鍛錬には大なる合理性が要求される。だがそうした体力技倆も精神的背景のないものが果して人世にどれ程の価値のあるものであろうか。ボクシングとかレスリング等が一つのみものとしてともかく娯楽の意味をもつことや、その修業の精進に学ぶべきものがあることは否定しないが、あのような残酷な殺風景なものが教養ある人士に喜ばれることは大きな不思議であり、年少者の間に恐るべき影響のあるまゝに放任されてある事を怪しむ、禁止か否かを云うのでない。そうしたものに敬意乃至は好意を払うか否かを問題とするのである。好戦的として一部外人が抑圧せんとし、一部邦人がそれに迎合した柔道剣道が如何に礼儀を具え、気品あるものであるか、相撲においてもボクシングやレスリングにない優雅礼儀を認めずに居れない。音楽のない体操は狂暴である。

### 第三卷 四一二a——第四卷四二七c

防護者の中で年長者が年少者を、又年長者の中で最もすぐれた者が治めることが当然である。人は自分の最愛する者を最もよく世話する。又自分と全く利害を同うし、自分の幸不幸がその人の幸不幸であるような人を最愛する。防護者の間から国家に対してこのような感じをもつ人を選んで支配者とせねばならぬ。吾々はよく彼等を觀察して少年時代より青年時を通じ成人になるまで、誘惑に負けず、力に屈せず、苦病悲哀恐怖の中にいつも義務を忘れず国のためにつくした人を選んで防護者支配者とすべきである。防護者は外敵を防ぎ国内の秩序を維持する者で、支配者の助力者支持者

である。或る神話によると人皆地下で作られ、同じ大地より生れた同胞であるが、或るものは金より、或るものは銀より、或者は青銅より作られ、それぞれの分に應じて、支配者防護者農夫職人等となる。各はその親の素質をうけつぐけれど、同じ大地より生れた者であるからには、金の子が銀となり、青銅の子が銀となるような事も時にはある。そのような時には親の身分に拘らず、子供の素質に應じてその仕事を与えられねばならない。防護者はそのように教育されているから安全な筈であるが、元来が勇猛な性質であるから一旦狂い出すと甚危険である。それ故彼等の住居その他は彼等の徳を失わせるような機会を与えないように工夫されねばならぬ。即絶対必要品以外に私物品を持たず、他人の入つてくるのを拒むような個人的な家を与えられず、食物は節度と勇氣ある訓練された軍人にふさわしく質素で、一年に必要なだけの費用しか支払われてはならぬ。且つ陣中の軍人の如く共同生活をする。彼等は己に人間として金銀に作られているのだから、今更世間に通用する又汚の源である金銀の必要はない。金銀をもつなら憎み憎まれ計り計られ、国民の敵となり暴君となり、外敵よりもむしろ内敵のために苦しむ。もし彼等が亡びるなら、国も亦亡びる。だが上にのべたような条件の下において防護者は幸福といえるだろうか。

元来吾々の作ろうとする国は只或階級だけの幸福でなく、全体の最大幸福を目的とする。全体の幸福をめざして秩序づけられた国においてはじめて正義が見出される。国内の各階級が各気儘であるなら、果して全体の幸福各自の幸福があり得るだろうか。腐敗が只靴屋の間にあるだけならその危険は大した事はない。然し防護者階級が腐敗したなら国は、成り立たない。防護者及他の階層の人々は只各自の職に専心しこれに熟練すればよいので、そうすれば、国全体として秩序が整い、各階層それぞれに應じた幸福が与えられる。

職務を尽すことにおいて、富は贅沢と怠惰によつて、貧は卑屈と邪心によつて、大きな妨をなす。富める国を相手として戦うときも、こちらの訓練された軍人なら一人でむこうの二人三人を相手にできる。富める国が二つあるならその一方と戦い、他方にはその戦利品を提供して協力を求める事もできる。たとえ富める国同士が同盟しても、彼等の国

の中が已に貧富兩派に分れているから、敵として決して恐れるにたりない。

吾々が作らんとする国は正しい秩序の行われる国で、そこに強さがある。そこで国は統一のとれるかぎり大きくしてもよいが、外観だけ大きくなることや、小さくなりすぎる事をさけねばならぬ。国民は凡て自然によつて定められた位置において己の職分に専心して固く統一される。人が十分教育されて英智をもつようになれば、こうした原理を理解するようになる。注意すべきことは音楽と体操とが原初の形を維持して、新奇を追わない事である。音楽の様式が変ると国の根本的な法律を變るようになると云われているが、實際無法（無秩序）は無邪氣な形をした娯樂を通してのびこみ、放姿は徐々に精神を犯し、習慣作法進んで誓約法律の中にまではいつてくる。子供ははじめから嚴しい制度によつてしつつける。まづ遊戲により次で音楽により、秩序の習慣をつけるなら、この習慣がその後の活動に伴い發達の原理となる。教育が人を一定方向に確かに向わせれば、自分で自分の生活を決定し、一々の場合に自分のなすべき事を知る。法律によつて市場や警察や海港についての規定をきめなくとも、身につけた原理によつてさばいていく<sup>⑧</sup>。然しこの根本原理が確立されなかつたならば、恰も自制心のない病人がいつまでも不節制を改める事ができず、いつまでも病人である如く、勝手に法律を變えたり、市民達の意を迎える人がよい政治家だと思われたり、眞実を語る人を敵と思うようになる。

已にのべたようにソクラテスは今までの所、又この後でも正義と幸福の關係について直接に何もいつていないことは顧みて他を云うといったように故らそれを避けたのか、或はまづ順序を追うて根本問題を論ずる間に、この事は改めてとりあげずとも解決されたのであるが、私は後者であると解する。人間の生活が意義あり充實している程、改めて何を幸福とし如何にして幸福を追求するかなど問題にならない。強いていえば彼の生活全体心境の全体が幸福で、それを幸福とよぶのは適當の名称でない。それは意義がある、甲斐がある、価値があると第三者が認めるような生活であり、他の何かと対比し、何か特別な場合に反省してはじめて幸福と形容されるのでなからうか。

#### 第四卷 四二七d—四四五。②

まづ吾々の國が成立した。こゝに正、不正が如何なるものであるかを考察しよう。國家において見出される徳には第一に知慧がある。これは知識の一種であつて、善き分別を意味し、特殊の職業に関する知識でなく國の全体や他國との關係についての知識であり、支配者の間に見出されるべきものである。支配者階級は一國の中で最少數であるが、この階級に知慧があるときは、その國全体としても知慧があると云われる。

第二に勇氣の徳がある。勇氣とは眞に何が恐るべきものであるかを確實に認識し、如何な場合に望んでもこの認識を誤らないことである。國のために戦う防護者に必要な徳で、一國が勇敢であるといわれるのはこの階級が勇敢であるからである。野獸や奴隸も勇氣をもつように見えるが、彼等が何を恐るべきであるとみるかは本能的にそう感じるだけで合理的でない。それは勇氣とは別の名でよばれるべきものである。布地を染めるにはまづ地質を選び又染色のための準備をしておく。同様に防護者に勇氣を養わせるには苦痛や快樂のために色のはげないよう、地質の選択や準備に注意を要する。

第三に節制の徳がある。これは快感欲求の統制であつて前二者よりも協和音に近い。それは自主と呼ばれるべきである。自主とは自分が主人であつて又奴隸であるというわけで矛盾した語であるが、人にはより高い原理とより低い原理があつて、小さいけれど高い原理が大きいけれど低い原理を支配するのが自主である、一國についても少數の高い階級が多數の低い階級を支配し、支配者の單純にして節度ある欲求と英智が婦人、子供召使教養の低い自由人達の多様雜多な欲求を統制するならそこに節制が現われる。吾々の國では支配する者服従する者の間に、誰が支配すべきかについて完全に意見が一致している。かゝる統一、一致の行われる國では、支配者の間にも被支配者の間にも亦節制が行われている。

この三つの徳の具備される処に正義があるのだが、実は正義は遠方を探し求めなくとも手許にあつたのである。正義は誰にとつても等しく重要である。支配者は法を司るが法においては他人のものをとらず、又吾物をとらせない事が第一の原理で、この吾のものを吾に属するものを、吾がもち吾がなすのが正義である。かりに靴屋が大工の仕事をするというのならば大して国の害にならない。しかし工匠たるべきものが防護者となり、防護者たるべきものが支配者になろうとするとき国は乱れ国は亡びる。それで国内の三階級は互に他に代らうとしたり、干渉してならぬ。もしそんな事をするならばそれが不正である。三階級それぞれの任務を忠実につくすのが正義である。

以上国について考察した事は個人についても同じく認められるであらうか。個人にも国におけると同じ原理と習慣とがあり、国はそれ等を個人から導き出したのである。

以上三原理は別々のものか一に帰するものか。即欲求するのも怒るのも学ぶのも皆魂全体の働きなのか、それとも魂の別々の部分の作用なのか。まづ厳密に規定しておくが、同一のものが同じ部分において、或は同じ事に関して同一時に反対に作用する事はできない。同じ地点に立つたまま手や頭を動している人は、胴体は一地点に静止し、他の部分が運動している。真直ぐに立つたまま廻転している独楽は軸に関して静止し、同辺については運動しているものである。さて渴けば飲を欲する。然るに何かの理由でこれを抑止する。即渴きながらも飲を欲しないことがある。そのとき飲を欲するものと欲せざるものは魂の中の異なる原理で欲求と理性である。気力(勇氣意志)は欲求と異り、時としてはこれと争う事もある。<sup>29</sup>しかし欲望に加担して理性と争う中はない。他から苦を与えられても、理性がそれは自分のした当然の報だと判断するなら、どこまでもその苦に耐えこれに克とうと決心する。しかし不当に苦を加えられたと信ずるとき理性の味方をして、奮然として立つ。一見して気力は非合理的で欲望の種類であるように思われるが、かく理性に味方するものである。然しそれは理性でなく、動物でも幼児でも気力はあつても理性は缺けているか、或は乏しい。かくて国におけると同じく個人にも三原理があり、その各々それぞれの機能を充たす事によつて、その人が賢明とか勇敢とか

節制とかいわれ、その三機能の統一され調和した人が正義の人である。音楽と体操は貴い言葉と教訓によつて理性を支持激励し、諧音韻律によつて意力の野性を洗練し温良にし、両者を調和させる。かくして両者協力して、心の働きの大部分を占め且仲々満足せしめがたい欲望を支配する。もしこの両者の見張りがなかつたなら、欲望はそれの充足により益々膨大し、元来は自分の配下でないものまで隷従させ、全生命をも仆すに至る。氣力は理性の命令により心身に対する敵を防ぎ、快苦に於て当然恐るべきものを知り、理性の命令に従う。氣力の勇によりその人全体として勇であるときれる。理性とよばれる小さな部分に魂の各部分又全体の利益についての知識が納められて居て、理性部分の賢きが故に人全体が賢いといわれる。この三部が調和し、理性と氣力が欲望を支配すべきことが認められ、欲望がその命令に服する人が節度ある人で、そこに正義が現われる。かの三つの内面的要素が、その一つが他に代る事をせず、他に干渉もせず、各がその職責を全うし、内面的生活が整えられ、それがよく自らに主たり掟たることが正義で、正義は内面的關係に関する性質である。それは諸の音調が調和してもはや多でなく、一であると同じで、かかる境地においては身体、富、政治凡てに於て如何にすべきかが明らかでそれを一々に法律で定めるべきでない。

こうした調和の維持に協力するのが正義、それを掌る知識が英知である。若し總の部分が互に犯し全体と争うなら、忽ちに混乱に陥り怯懦放蕩無知不正を生む。かくていずれが幸福であるかは明白である。病める身にとつて美食も富も名誉も楽しみとはならない。病める心に何が与えられようと幸福のある筈はない。

正義を論ずるソクラテスの言葉に、正しいものは金銀の貯を盗む虞のより少い者ということがある。そうした表現は他の非常に理想的な表現と対照して一種の可笑味さえさそうものである。しかしそこに現実的なものを十分に認識しつつそこから純粋な姿をとりだす、又多様雑多な個々物の中に唯一普遍のイデアを直観する彼の能度がみられる。種々の疑惑非難を招く婦人共有論においても彼のこの能度を念頭においているなら、彼の真意を推測する事ができるように思う。とにかく実に通俗的な言葉から自然に物の核心に、世間人の処世談から真に高い理想に進むその過程にさして無理



を感じさせない。

註 ① 以下区分は T. M. Knox, *Plato's Republic*, London, Thomas Murby & Co. に従つ。

② 今までの議論において已に明かなように、ギリシア時代において、善・よい、といわれるものは道德的善よりも広く、人に喜びむかえられるもの、ためになるものをいう。吾国語における「よい」の意味に相当している。

③ ギーゲスの指環その由来については国家篇のこの本文にも説明してある。リディア王に仕えていたギーゲスが偶然見出した指環が、吾国の伝説のかくれ簍のような不思議な力をもっていたが、ギーゲスはこれを悪用して王位を奪つた。

④ 当時ソフィストの徒が他日政治界に活動せんがため準備の修養をしつつあつたギリシアの青年の教師としていたが、弁論の術は終に詭弁の術となつてしまつた。

⑤ 神戸女学院大学論集第三号、ソクラテス倫理の示唆、同第四号、道德と知性。

⑥ Jowett, *Dialogues of Plato*, Vol II. p. 27. Rep. Introduction.

⑦ ibid.

⑧ *Plato, Republic*, 363, d.

⑨ 思うに魂が愚昧で、正しき認識をすることができず、偽を真として自らもかく信じ、他人にもそう信じさせようとする。このような魂は自省して一度自己を否定しないかぎり向上の望はない。ソクラテスが自ら悪と知りつつ悪を行うことは、悪と知らずして悪を行うよりもまたといった逆説もここから生じる、カントが義務意識を以て道德的善の規準とする事にもつながりがある。

⑩ 法律規則によつて凡ての紛糾困難が排除されるものでない。世には法を守る人々に対し、これを意図して破ろうとする人も居るからであり、法で到底規定しつくせない程世の中は複雑であるからである。

⑪ ここでは作中人物の言葉をそのままに写したとの意味であるが、プラトンの芸術論や認識論形而上学ではもつと深い意味がある。

⑫ 古代ギリシアの酒神ディオニソスの祭における甚陶酔的な踊りと合唱で、悲劇の初めとなつた。

⑬ 叙事詩を吟唱する人。

⑭ 国家篇の教育論には環境の影響が力説されている。それは被教育の側からは模倣である。

⑮ プラトンの芸術論を取扱つた文献。

Pierre-Maxime Schuhl, Platon et l'art de son temps, Felix Alcan.

Rupert Lodge, Plato's Theory of Art, Routledge & Kegan Paul.

①6 複雑な統一なき雑多をいうものと思われる。単純を以て内容の貧弱をいうのではないことわつて云る箇所がある。

①7 Jowett, Plato, Repub. Introduction.

①8 道徳や教育においてこの事は全く真実で些末な事まで規定し、この規定によつて面倒や苦心を省こうとする誤を指摘している。

①9 私はこの論集第二号において幸福に関する私見をのべた。今日統出する幸福に関する著述はさしおいて、次のようなものがある。

セネカ・幸福なる生活について、樋口勝彦訳、岩波文庫

ヒルティ・幸福論、草間平作訳、岩波文庫

ショーペンハウエル・幸福について、石井正訳、角川文庫

武者小路実篤・幸福論、角川文庫

Bertrand Russell, The Conquest of Happiness, Signet Books.

②0 この章はノックスの区分の十・十一・十二を併せて一としてある。

②1 権利・義務の原初的な形である。

②2 ソクラテスはその一例として、或る人が戦場に横わる醜い屍体を見るに忍びない気持と共に見たい好奇心にかられ、終に見なければ見ろと好奇の願望に負けつつも憤を発せずに居れなかつた話をのべている。もし見ずにすむならそうした憤を感じないであろうという事は、氣力が理性に近いものをもつからである。ノックスは見たいという時にはまだその対象については何も知らないが、見まいという時には対象の何であるかが分つて居るので、多少理性が働いているが、十分の理性ではないと解している。Knox. p. 26.

Endo, Teikichi

## Study on Plato's Republic

### Résumé

This study is continued from the previous number and treats the Republic, Book ii, 357 a—Book iv, 445 e. It is divided into parts according to the subjects dealt with. The division of Knox (Plato's Republic, Thomas Murby, London) is adopted, whose three last parts are made into one in this study. The subjects are (the titles here are my own and are not used in this treatise), The value of justice (Thrasymachus' view repeated), the making in imagination of a state with its three social classes, the education of its guardians, the mode of life and duty of the guardians, and courage, wisdom, temperance and justice in a state and man's soul.

Attention is drawn to the process of reasoning or way of thinking rather than to conclusions. Points bearing on problems in our current life are discussed, such as gymnastics without music, censor on literature etc. Passages discussing about music in detail are left out (397—403) to be taken up together with others referring to the same subject, when an opportunity is offered for it.